

梵文方便品十如に関する異相と、
その若干の考察

宇 治 行 忠

ये च ते धर्मा यथा च ते धर्मा
यादृशाश्च ते धर्मा यल्लक्षणाश्च ते ध
र्मा यत्स्वभावाश्च ते धर्माः ।

य च यथा च यादृशाश्च यल्लक्षणाश्च
यत्स्वभावाश्च ते धर्म इति । तेषु
धर्मेषु तथागत एव प्रत्यक्षी उपर
ीक्षः ॥

①

(11の1) ye ca te dharmā yathā ca te dharmā yādṛśās ca te dha
rmā yal lakṣaṇās ca te dharmā yat svabhāvās ca te dharmāḥ |

①

(11の2) ye ca yathā ca yādṛśās ca yal lakṣaṇās ca yat svabhāv
ās ca te dharmā iti

①

(11の3) teṣu dharmeṣu tathāgata eva pratyakṣoparokṣaḥ ||

梵文方便品十如段（行忠訳）

如来所説の諸法は何れの所より来るか、その由る可き所を了し、衆相の根本、法の貌を分別し自然に法を知り給う。而して如是法とは何ぞや、それ等の諸法の相とは何ぞや、然して法の性とは何ぞや、是の如き諸法の眞実の相を知り給う。

（これは研究途上の筆者の訳でありますから後日改訂される事あるも、御了承下さいますよう。）

妙典「唯仏与仏乃能究尽諸法実相所謂諸法如是相、性、体、力、作、因、縁、果報本末究竟等」と訳されています。

正法華経は「大聖所説 得未曾有 巍々難量 如来皆了 諸法所由 従何所来 諸法自然 分別法貌 衆相根本 知法自然。（大聖の所説を得ること、未曾有かつ巍々として量り難し、如来は皆諸法の由るべき所を了し、諸法は自然に何れの所より来るか、法貌衆相の根本を分別し、自然に法を知り給う。）

（行忠訳）

添品法華経の方便品は妙典と同文である。

又次に西藏語方便品中の十如の処が何うなっているかを河口慧海先生の訳によって見ますと、「舍利子よ、如来が知らるゝ所の法を、それはまた如来が如来に説明し給えり。

舍利子よ、諸法はまた如来自身が示し給えり。説法はまた、如来自身が知り給えり。諸法は如何なるか、諸法は如何ようにあるか、諸法は何に似たるか、而して諸法の相は如何なるか、諸法の性は如何なるか、諸法は何であるか、如何様にあるか、何に似たるか、相の何であるかと、性の何で

あるかをも知り給えり」と訳されています。
(2)

次に近世に於いて梵品より直訳されたものについて調べて見ますと、木村泰賢先生の—upāya—kauśalya parivartoの訳を見ますと「彼等諸法に
関して、是等ありのまゝなる法、是等の法はかくあり、是等の法はかくの
如くあり、是等の法はかくの如き相であり、是等の法はかくの如き体であ
る。それ等の法にて仏陀のみ現見す」となっています。

以上の如く訳された先生の意見として、「法華経自身の立場より見れば
天台等の考える如く、所謂如是教に重点を置いたものでは無く、たゞ之れ
によって法華の能説者たる仏陀の力用を明らかにして、以って法華経の真
理たる証明とせんとしたまでである。

故に之れを基として、三千三諦などと云う、世界観を建てるが如きは寧ろ
法華経の真意以上の挙と云わねばならない」と、非常に注目すべきこと
を云って居られる。
(3)

特に方便品を見て我々が感じる事は、十如是に関する限り、諸典まちま
ちである。

例えば漢訳の妙典、正典と訳が異っている。

妙典が十如是と成っている所以について、或る学者は、羅什三蔵がこの
妙法華経の翻訳をする前に、大智度論の翻訳をした事をとりあげて、この
大論にはしばしば問題を十種に分別する項がある。この仕事をした後の法
華経翻訳に際し、その習性が羅什をして十如是と訳せしめたのであろう。
と云う意見を述べていられるのを見た事がありますが、之れは面白い見解
であるとは思えるが、余りにも穿ち過ぎであると云えるのでは無からう
か。何故となれば、梵語で *śca* と云う語は普通には訳して、正に、及

び、而て、また。と云うように殆んどの場合には、附帶詞。又は、接続詞。として用いられていますが、時には之れを（ca=如是）と漢訳されていることもある。この事実よりして、妙典が十如是と訳している事は、誠⁽⁴⁾に羅什三蔵の慧眼に敬服せざるを得ない、と云えるであろう。

妙、添の二品以外の、他の何の經典を見ても、十如是と訳されてはいない。

漢訳では妙典と添品法華經だけが、しかも同文の十如となつて掲載されている。

そしてその十如が方便品の哲学と云うよりも、法華經述門の哲学の基礎をなしている事は、天下周知の事実であると共に、天台教学の不滅の哲理たる諸法実相論の根柢をなすものとなっている。

こゝで方便品十如に対する古來の見解を一見してみますと。

劉宗の法瑤は十如を『智慧の照用なり』と云つて居ります。

蕪齊の玄暢は『仏の十力の功能なり』と云つて居ります。

地論師は『三乘法の内容を演べたものである』と云つて居ります。

梁の法雲は『諸法実相の諸法とは権智の境にして、実相とは実智の境なり。然して十如の内、相、性、体、力、作、の五如是は権智に約し、因、縁、果、報、の四如是は実智に約し。

本末は権智を結し、究竟等。とは実智を結せるものである。と以上のように分別して居ります。

これなぞは非常に巧妙に分別されていますが、智巖だけは此等の諸説を破して悉く不可なり。として自ら之れを『十法界』に約し。『仏界』に約し。『離合』に約し。『位次』に約して解釈せざる可らず。と又自ら四種の釈をなして曰く。

(一) 經に諸法と云うが故に十法界の釈を用うるなり。

(二) 經に仏の成就し玉いし第一希有難解の法。と云っているが故に仏法界の釈を用うるなり。

(三) 經に止みね、止みね又説く可らず、我法は妙にして思い難し。と云うが故に離合の釈を用うるなり。

(四) 經に唯仏と仏のみ乃し能く究尽す。と云うが故に位の釈を用うるのである。と云っている。

以上を四種の釈と云う、これを説明すれば、十法界に約すとは即ち十界を束ねて、地獄等の四惡趣と人天二乘菩薩及び仏との四類とし、各々その具する所の十如の不同を分別する事を云うのである。即ち各々の具する所の十如の不同を分別すると共に、その内で地獄、餓鬼、畜生、修羅等の四惡趣の十如をもよく之れを分別する。

ここに惡趣の一例だけをあげて参考とすれば、

多欲の衆生は地獄の苦具を見ても、反って欲境となして、起こす所の染愛の如きは、鉄床、銅柱等の苦を受くるの具をも追い求めて止まないものである。

教学の上から十如について一見してみますと。

人天、善趣の十如。二乗の十如。菩薩、仏界の十如。等十界各々十如ありて百界千如となり、一念三千の理を構成する。これについて摩訶止観第五の上の述ぶる所を見ますと「夫れ一心に十法界を具し、一法界に又十法界を具し、百法界あり。一界に三十種の世間を具すれば百法界に三千種の世間を具す。

然もこの三千は、一念の心中にあり。若し心なくば^や已みなん。^{すこし}介爾でも心あらば三千を具す、と云っている。

さすれば心が^{まへ}前にあって、法は後にあるのかとえば、そうでは無い。では、一切の法が^{まへ}前にあって、心はその後にあるのかと云えば、摩訶止観は

さにあらず、と云っている。

法華文句要義聞書第七に曰く。本末究竟の一如是は、他の相性体等の九如是の聡体にして、華嚴等の所説は八或は九如是に至るも、此の一如是即本末究竟のみは諸経に分説して、純一乗の法華経のみ能く之れを説くところである。と云っている。

又十界必ず十如、十如必ず十界。十界十如は但だ之れ真如法性、実相の妙理を云ったものである。」

之れを摩訶止観は十大章に配し「所詮摩訶止観と云えるは要するに、十如は是れ諸法実相の釈疏であり。理非造作の故に天真と曰い、証智円妙の故に独明と云う、要するに諸法実相とは摩訶止観十大章の大意である』と云って居る。

日蓮聖人は此の天台教学より一步深く即ち法華思想の *outworks* を打破って真理に直入されたものと云える。

方便品自身もその真実たることを説明して『仏の成就し玉いし所は第一希有にして難解の法なり。唯仏と仏とのみ乃し能く諸法の実相を究尽し給えり。』と云っている。

これは仏を通して人間の成仏が保証された言葉とも云えるのでは無かうか。

- (1) ローマ・ナイズの文頭の数字は筆者の「梵文方便品の解説と研究」の *s. k. t.* 本文の番号であります。
- (2) 梵蔵伝訳、法華経、世界文庫版 30頁
- (3) 大乘仏教思想論 328頁
- (4) 瑜伽師地論。菩薩地持経。中論。般若灯論釈。大乘中観釈論。梵漢対照仏教辞典（杖原本）等の諸典には、*ca*を如是と訳している。